

日本本土初空襲とミッドウェー海戦

平成18年1月14日 高根台公民館

昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾攻撃で幕を開けた太平洋戦争は予想以上の成功のうちに進められました。海軍はアメリカ太平洋艦隊、イギリス東洋艦隊を撃破し、新聞には連日のように「撃沈」、「轟沈」といった威勢のいい活字が躍りました。陸軍もフィリピンのバターン半島攻略に手間取ったくらいで、香港、マニラ、シンガポールの要衝を相次いで占領しましたし、戦争には欠かせない石油も、落下傘部隊の奇襲攻撃でボルネオ、スマトラの油田地帯をほとんど破壊されることもなく確保出来ました。何しろ半年たらずの間に、西はビルマからマレー半島、ジャワ、スマトラを経て、ニューギニア東方のソロモン諸島に至る広大な地域を占領下に収めたのです。連合軍の捕虜二十五万人、撃沈した軍艦は百五隻を数え大中破九十一隻。日本の損害は戦死約七千人、艦船二十七隻でしたが、巡洋艦以上の大型艦は一隻もありません。国内は連戦連勝に沸き立ち、何となくもう戦争が終わってしまったような、そんな安堵感に包まれた半年間だったので。

それが攻守一挙にところを変え、この戦争の大きなターニング・ポイントとなつたのが、これからお話するミッドウェー海戦です。開戦からちようど半年、十七年六月五日のことですが、それも普通に戦えば負けるはずのない戦いだったので。日本海軍が動員した兵力はアリュウシャン攻略作戦も含めてですが、空母八隻、戦艦十一隻、巡洋艦が二十一隻。艦艇は大小実には二百隻を超え、飛行機も約六百機と、文字通り連合艦隊の総力を結集したものでした。対するアメリカは空母三隻、戦艦はなく巡洋艦も八隻に過ぎません。圧倒的な戦闘力の違いでしたし、パイロットの技量の点でもその頃はまだ米軍は日本の敵ではありませんでした。飛行機の性能もアメリカは開発途上の段階、日本海軍の誇るゼロ戦、零式艦上戦闘機に対抗出来るような優秀な戦闘機、攻撃機は持っていませんでした。それなのに日本海軍は、なすところもなく敗れてしまいました。主力空母六隻のうち四隻が沈没し、まさに目も眩むような損害でした。これで太平洋の制空権、制海権を失うことになり、米軍の本格的な反攻を許すことになったのですから、日本敗北の運命はこの時、ほとんど決定的になったと云つてもいいでしょう。

全ては勝利に奢り、油断から始まっていたのです。ハワイ作戦の成功は、海軍が秘密保持に細心の注意を払い、慎重に作戦準備を進めて万全を期した結果でした。陸軍の南方作戦にしても、相手が装備が貧弱な植民地軍だったからです。ところが初期作戦が余りにも順調に行き過ぎたため、アメリカを甘く見るようにな

つてしまつたのです。首相の東条英機は真珠湾の戦果を聞いて、これは秘書官の赤松貞雄大佐が書いているのですが、「予想以上だね。これでいよいよルーズベルトも失脚かね」と、大変なはしゃぎぶりだつたと云います。ですから十二月二十九日のことですが、この戦争には反対だつた東久邇宮陸軍大将が東条を訪ね、「緒戦の情勢が有利なので、シンガポールが陥落した時点で、米英に対し和平工作を始めるべきだ」。こう進言したところ、東条は「この調子ならジャワ、スマトラは勿論、オーストラリアまでも容易に占領出来ると思う。この時機に和平などは考えるべきではない」と、傲然と言ひ放つたと云うのです。

しかし実のことを云いますと、政府、統帥部にとつて最大の問題は、緒戦の勝利の後、その後の戦争指導計画がほとんどなかつたことなのです。この戦争をどのように終わらせるのか、終末計画を描けないでいたのです。参謀本部で戦略を立てる戦争指導班は勝利に沸き立つ開戦の日、早くもその不安を「機密戦争日誌」に書いています。「理想的戦争発起の成功せるを確認し、感謝感激に堪えず」としながら「然れども戦争の終末を如何に求むべきや、是れ本戦争の最大の難事、神一如の境地に於て始めて之が完きを得べきや」と書いているのです。日本を終末を描けない戦争に追い込んでいったのは、他ならぬその参謀本部参謀たちだったので、それが神と一体の境地などと神頼みなのでは話になりません。

それもこれもアメリカを直接屈伏させる手段がなく、対米戦に勝利を得る見通しがないまま、この戦争に突入してしまつたからです。開戦前の十一月十五日、大本営政府連絡会議で決めた「戦争終末促進ニ関スル腹案」では、開戦初期に南方資源地域を確保して長期持久戦態勢を整えんとしています。そしてまず中国との戦争を勝利し、ドイツ、イタリアと協力してイギリスを降伏させる。そうすればアメリカの戦意も失われ、やがて適当な条件で講和を結ぶことが出来るだろう。つまり、アメリカに王手をかける手段がないことを認めた上で、その対米戦の終結は、ドイツの勝利ないしは不敗を前提とし、アメリカの戦争継続意志の喪失に求めようと云うものでした。

しかし日本が頼みとしたドイツ軍は、この時すでにモスクワを目前にして猛吹雪の中、敗走を始めていたのです。例年より早い冬將軍の到来と共に、ソ連軍の反撃が始まりました。ドイツ軍は、ヒットラーが「三か月に片付ける」と豪語していた言葉通り、夏の装備のままです。戦車も大砲も凍り付いて動けません。ヒットラーがモスクワ作戦の中止、後退命令を出したのは、まさに日米開戦の日だったので、ドイツ側の流す「ドイツ有利」の情報を鵜呑みにしてきた日本は、こうした独ソ戦線の急変を全く知りません。しかもソ連駐在の陸軍武官が何と電報したきたのかと云うと、「南方がひと片付き次第、世界戦線の弱い部分、これはソ連のことですが、そこを突破して戦争打開の端緒を得よ。明春以後のドイツ軍の作戦にいつでも応じられる態勢を整えておけ」と云うのです。高松宮は日記に、

「こうしたことを考える陸軍サン多かるべし」と批判していますが、事実陸軍の目は日米戦争が始まったばかりだと云うのに、ソ連に向けられていたのです。

それは、開戦時の陸軍の兵力配置によく表われています。五十一個師団のうち南方に向けたのは、わずか十一個師団なのです。満州十三個師団、中国戦線二十一個師団で、後は内地四個師団、朝鮮二個師団ですが、南方で作戦を展開しながら、陸軍が主力を置いていたのは中国と満州でした。第一、作戦計画の表題からして「対米英蘭戦争ニ伴フ陸軍作戦計画」と、局地戦の位置付けです。アメリカの国力、その反攻を考えれば、「伴フ」どころではなく、アメリカを主な敵とした作戦計画を立て、主戦場も南方、太平洋としなければいけなかったのです。ところが参謀本部が考えていたのは、第一段作戦が終了したら南方から一部兵力を引き揚げ、北方または中国戦線に転用することでした。後は太平洋を中心とした海軍の戦いだから、占領地確保に必要な兵力だけ残しておけば十分だと見たわけです。陸軍がようやく南太平洋を主戦場と認めるようになったのは、昭和十八年初め、ガダルカナルの敗北が決定的になってからでした。参謀本部が「戦争の終末をどう求めるか、最大の難事」としながら、いかにアメリカを知らず、対米戦に軽い気持ちで入ってしまったかを物語っています。

参謀本部参謀で戦後伊藤忠の会長をされた瀬島龍三さんは、「戦争指導最大の使命は、戦局の将来を的確に洞察することだ」と云っています。残念ながら日本は、支那事変以来誤った判断の連続でした。昭和十二年に蘆溝橋事件が勃発した時、陸軍は蒋介石に一撃を加えれば簡単に解決出来ると、些細な発砲事件を全面戦争に拡大してしまいました。十五年夏、イギリス軍がダンケルクから撤退すると、ドイツのヨーロッパ制覇は決定的だと日独伊三国同盟を結んでいます。十六年六月の独ソ戦ではソ連崩壊は時間の問題だと見ましたし、蘭印に出るのならともかく、南部仏印ならアメリカは出てこないだろうと、南部仏印に進駐して石油の全面禁輸を招きました。そして今度は日米開戦の日に、独ソ戦線の逆転が始まったのです。情報軽視もありましたし、何でも軍部の考え中心、軍の作戦計画が国家の戦争指導を左右すると云った本末転倒が生じた結果でもありました。

開戦三か月後、十七年三月七日に大本営政府連絡会議が決定した「今後採ルベキ戦争指導ノ大綱」も、緒戦の勝利に浮かれて極めて楽観的な判断に基づくものだったのです。まず「引き続き既得の戦果を拡充して長期不敗の政戦態勢を整えつつ、機を見て積極的方策を講ず」、そして「占領地域および主要交通線を確保して、国防重要資源の開発利用を促進し、自給自足の態勢確立および国家戦力の増強に努める」としています。この「機を見て積極的方策をとる」とした方針によりミッドウェー作戦を実施して大敗するのですが、致命的なのは長期不敗態勢をどのように構築するかと云う、具体的な計画がなかったことです。

例えば「主要交通線を確保して」とありますが、海軍は日本海海戦以来の「艦隊

決戦主義」、大きな軍艦を造ることばかりに熱中して、台湾海峡から南の長大なシーレーンを守る兵力も、具体的な方策も持っていなかったのです。所詮は単なる作文でした。開戦時、商船護衛にあたる海防艦はたったの四隻です。十七年になつて三十隻の建造にかかりましたが、商船護衛を専門に担当する海上護衛総司令部が設置されたのも、開戦から二年も経つた十八年十一月なのです。第一、いくら石油を確保しても、タンカーがなければ内地に運ばれません。タンカーは数こそ百十三隻ありましたが小さなものばかり。総トン数五十四万トン余りと心細いものでした。十七年五月になつて慌てて貨物船をタンカーに改造するなど、タンカー増強の応急措置を決定しましたが、全てが後手後手になつたのです。

ハワイ作戦の成功にしても、それまでの常識を破つた航空母艦中心の航空攻撃によるものでした。日本はせつかく「飛行機の時代」と云う新しい時代の扉を開いておきながら、相変わらずの「大艦巨砲主義」に取り憑かれていたのです。大和、武蔵に続いて巨大戦艦信濃の建造にかかつていましたが、その信濃を空母に変更し中型空母六隻を建造することにしたのも、ミッドウエーで主力空母を失い愕然とした結果でした。逆にハワイの教訓を素早く取り入れたのはアメリカです。作戦を航空主体に切り替え、空母生産とパイロット養成にピッチをあげたのです。

しかも一番かんじんな飛行機の生産でも、日本は遅れをとつてしまいました。開戦時、海軍で実戦に使える飛行機は二千二百六十五機でしたが、それが一年後に二千六百五機と、激しい消耗戦でたった三百四十機しか増えていなかったのです。陸軍も保有機数千六百機がみるみる減つていきます。参謀本部は十七年七月飛行機増産を強く要求したのですが、陸軍大臣の東条にあつさり蹴られてしまいました。「飛行機の生産だけで戦争は出来ない」と云うのです。「少ない飛行機で勝つ工夫、転換が必要だ。遠距離爆撃機と戦闘機だけとし貧乏人らしく考えよ。輸送機などあるのは贅沢だ」と、相も変わらぬ精神論をぶつていたそうです。原料入手難や生産のネックで軍需動員計画が圧縮されると、これが陸軍の体質なのでしょうが、「地上絶対」が「航空優先」を押し退ける結果になつたのです。日本が本当に「航空第一主義」をとるようになったのは、ガダルカナルを失つた昭和十八年になつてからでした。戦争中に日本が生産した飛行機は約六万五千機だつたと云われます。開戦当初の能力から見れば目を見張るものがありますが、それでも約二十九万機も作っていたアメリカの生産力には、遠く及ばなかつたのです。

開戦直後の東条内閣が何をやっていったのか、その姿が「高松宮日記」に出てきます。何とかこの戦争を止めさせようと、昭和天皇に直訴された高松宮ですが、不思議なことに戦争が始まつてからは、膨大な日記の自身はほとんどが第一線部隊の報告電報、各司司令部の命令電報の写しです。日記の編纂に当たつた作家の阿川弘之さんは「事実の収集記録だけに専念し、余計なことは云わない、書かない、一喜一憂もしないと、思い決めてしまつたかの観がある」と書いています。それ

でも阿川さんは「ご自身の感想、陸海軍や官僚のやっていることへの批判、所見はめつたに出てこないが、稀にその種の書き込みにぶつかるとハツとする」。こう云っています。十七年二月二十六日の日記には、こうあります。「首相官邸に聞きに行く。今後二十年の計画とかで、まるでお題目みたいであった。午後もあるが、もう沢山と帰る」。高松宮が云う通り、東条内閣が緒戦の勝利を背景に一生懸命取り組んだのが、お題目づくりであり自分の体制強化だったのです。

外務大臣の東郷茂徳は当時を振り返って、「日本一般に戦勝に酔ってしまったって、二、三十年先の戦力涵養に備える必要があるとして、企業整備とか学制改革のような、その影響が長期にわたる施設に着手するとともに、十年後に役立つような工場の設備に貴重な材料を消費していた」と批判しています。東郷は閣議の席で「現在は戦に勝つための施設に限定すべきだ。そうでなければ、敗戦となるのは明瞭だ」。こう云って反対しましたが、東条は勿論、主管大臣も耳を傾けなかったと云います。

この東条内閣ほど、大きな機構いじりをした内閣もなかったでしょう。二年九か月の任期中に、大東亜省を手始めに運輸通信省、軍需省、農商省と新しい省を四つも作って、その都度関係者の激しい反発を招きました。東条と云う人は、軍人にありがちな権威好きのせいか、何でも法的な権限を強化して、上から命令すれば「事足れり」とする傾向が強かったようです。これが「東条ファッショ」などと人心収攬に失敗する原因にもなりましたが、開戦と共に素早く手を打ったのが言論統制です。まず十二月八日の夕刊から、「敵に利用される」と云う理由で天気予報が消えました。外電もわずかに枢軸側と南米中立諸国の電報が残っただけで、ほとんど姿を消しました。そして十九日には、言論出版集會結社等臨時取締法が公布されたのです。「戦局に関し人心を感乱すべき事項を流布した」と認定された時は、たとえそれが本当のことであっても罰せられることになりました。「ミッドウエーで大敗した」なんて云えば、勿論罰せられたのです。また行政官庁が「必要あり」と認めた時は、いつでも新聞の発行許可を取り消せるようになり、「東条独裁体制」の第一弾とも云うべきものでした。

東条内閣が次にやったのが、「翼賛選挙」と悪名高い十七年四月の第二十一回総選挙です。翼賛と云うのは力を添えて助けることですが、総選挙は近衛文麿内閣以来、戦時中という理由で先送りされてきました。それをこの勝利している時に断行すれば、戦争完遂のため国民勢力を結集させる、絶好の機会だと思っただけです。それも政府の方針に拍手喝采を送るだけの、ナチスのような議会づくりが目的です。しかし帝国憲法で「議員公選制」が謳われている以上、政府自ら候補者を推薦することは出来ません。そこで政府の隠れ蓑として考えたのが、翼賛政治体制協議会と云う政治結社です。元首相の阿部信行陸軍大将を会長に、各道府県に地方有力者による支部が設置され、政府に協力的な候補者だけ、それも議員定

数いっぱい、四百六十六人推薦させたのです。手足となったのが警察で、現職議員を調査して、甲は率先して国策遂行、乙は一応国策支持、丙は反国策的、反政府的言動で不適格。三種類に分類したりリストを作り、当然丙の議員ははねて、乙も積極的な新人がいれば、そつちを推薦しました。

総選挙は四月四日公示、三十日投票となったのですが、推薦を受けなかった候補も六百十三人が立候補、競争率二・三倍と普通選挙始まって以来の激戦となりました。政府は推薦候補を当選させるため、それこそあらゆる組織を動員して、手段を選ばない選挙干渉と弾圧を行なったのです。推薦候補には陸軍省軍務局から選挙費用として五千元渡されました。五千元あれば家一軒立った時代ですが、臨時軍事費の機密費から出したものです。福島で当選した新人は「あんなラクな選挙はなかった。買収も警察官の護衛付きでやったし、供応も警察署のすぐ脇の料亭で白昼公然とやった」と云っています。これに対して非推薦候補の支持者には、学校の校長さんや駐在所の巡査が先頭に立って、「陛下のご命令に背くものだ」とか、「配給を停止するぞ」と云って脅したのです。演説会を開こうとする時、その時間に合わせて町内会や婦人会の会合を開いて出られないようにし、青年団員が会場を囲んで入場を阻止しました。運動員の中にも「非国民呼ばわりされるのは困る」と、辞退する者が続出しました。

それでも非推薦候補は、「憲政の神様」と云われた尾崎行雄、反軍演説をした斎藤隆夫、戦後首相になる鳩山一郎、三木武夫など八十五人が当選したのです。推薦候補三百八十一人が当選し、形の上では当選率八一・八%と政府側の圧勝でしたし、東条内閣に「イエス」と云うだけの翼賛議会が成立しました。しかし非推薦候補の得票総数が三五%もあったと云うことは、東条に対する批判票がいかに多かったかを物語っています。三重二区から八十三歳で立候補した尾崎は、「衆議院は民選議員によって構成されるべきものだ。翼賛選挙は憲法違反だ」と真っ向から批判したものですから睨まれました。東京で友人候補の応援演説をした際、「売家と唐様で書く三代目」。この川柳を引用して、「ヨーロッパの皇帝には三代目で没落する者が多いが、日本はますます良くなっている。それは憲法に基づく総選挙と云う立派な制度があるためだ」。こう演説したのが不敬罪にあたりと難癖をつけられ、投票一週間前に起訴されたのです。一審は有罪でしたが、上告審では「不敬罪の犯意はなかった」として無罪になりました。

そしてもう一つ、是非とも話しておきたいのは、日本の敗色が濃くなった二十三年三月、現在の最高裁に当たる大審院で「鹿児島二区」の選挙はこれを無効とする判決が出たことです。鹿児島は推薦候補が全議席、それも圧倒的な得票数で独占した県ですが、民事第三部の吉田久裁判長は「選挙を妨害された」と云う非推薦候補の訴状を受理すると、自ら鹿児島に出張して関係者百数十人を徹底して調べたのです。吉田は「いかに戦時中であっても、選挙の自由公正が蹂躪されるような

ことがあつては、国論の本当の基礎が歪められる」。そう思つて、特高警察の激しい妨害も予想されましたから、家族に遺言状まで書き残して出掛けたと云います。その結果、県知事薄田美朝が先頭に立つて非推薦候補の選挙を妨害した実態が明らかになり、画期的な判決となつたのですが、戦争中の暗黒時代にも、こうした権力に屈しない信念のある判官がいたと云うことは、日本の裁判史上特筆すべきことだつたと思ひます。

しかし正直云つて、こんな茶番劇のような選挙にうつつを抜かしている場合ではなかつたのです。選挙戦さなかの四月十八日、日本本土はアメリカの航空母艦から発進した爆撃機によつて、東京、川崎、名古屋、神戸などが初めて空襲されたのです。被害そのものは全国で死者四十五人、負傷者百五十三人、家屋の全焼全壊百八十一戸と、戦争末期の空襲被害に比べれば問題にならないほど軽いものでした。ところが虚をつかれた政府、ことに陸海軍の衝撃は大きかつたのです。白昼、全く無抵抗で帝都上空に侵入を許した上、一機も撃墜出来ずに逃してしまつたのです。

航空母艦に陸軍の爆撃機を積んで日本を空襲する——この破天荒な計画は、ルーズベルト大統領が洩らした一言、「出来るだけ早い機会に日本本土を爆撃したい」。一月十日のことだつたと云いますが、この一言から始まりました。真珠湾以来負け続けのルーズベルトとしては、国民の戦意高揚のためにも、早い機会に報復したかつたのでしよう。海軍で検討を進めましたが、空母の艦載機ではほとんど不可能でした。日本近海に近付けば、たちまち日本艦隊の攻撃を受け、当時六隻しかない空母の犠牲を増やすだけです。陸軍に協力を求めた結果選ばれたのが、双発爆撃機のノースアメリカンB25でした。空母を安全な海域に置いて日本本土を攻撃するには、日本の哨戒線ギリギリの九百^{キロ}地点から発進させる必要があります。艦載機では無理でも、航続距離の長いB25なら東京を夜間爆撃した後、二千^{キロ}近く離れた中国本土へ退避させられると云う計算です。

爆撃隊長には、スピード・レースに再三優勝して「スピード・ジミー」と云われたジムス・ドウリットル陸軍中佐が任命されました。問題は、航空母艦の狭い飛行甲板から、どうやって重たい陸軍の爆撃機を発進させるかです。ドウリットルは三月三日、志願してきた隊員八十名をフロリダの空軍基地に集めると、滑走路を飛行甲板と同じ長さ二百三十八^呎、幅二十四^呎に区切つて、発艦の猛訓練を始めたのです。距離百六^呎あれば離陸出来るようになり、B25十六機を積んだ空母ホーネットがサンフランシスコを出港したのが四月二日の早朝でした。途中で第十六機動部隊司令官ハルゼー中将の空母エンタープライズと合流し、北方航路をとつて密かに日本本土に接近したのですが、十八日早朝、日本海軍の監視艇「第二十三日東丸」がこれを発見したのです。

監視艇と云つても百^ト足らず、速力七ノットのカツオ漁船です。日本海軍には

まだレーダーがありません。そこで開戦と同時に七十五隻のカツオ船を徴用し、本土東方千二百^{キロ}の海上で哨戒任務に当たらせました。武器はわずかに機銃一丁と小銃二丁。乗組員十五人の半分が漁師さんで、「敵発見」の無線のキイを叩いた時は、確実に死が約束されている「特攻レーダー」ようなものでした。日東丸が「敵飛行機三機見ユ」と第一報を打電したのが午前六時三十分。続いて六時五十分「敵航空母艦三隻見ユ、ワガ地点犬吠埼ノ東六〇〇カイリ」、千百十^{キロ}の地点ですが、そして「ワレ敵ノ攻撃ヲ受ク、全力ヲ拵ゲテ交戦中」を最後に消息を断つたのが七時二分でした。撃沈されたのです。

指揮官のハルゼー中将は決断を迫られました。計画では十八日午後、八百^{キロ}地点から発進させ夜間爆撃の予定でしたが、その地点にはまだ三百^{キロ}以上もありま。発見された以上攻撃を受けることが予想され、任務遂行か、それとも攻撃を断念して引き揚げるか。指揮官の決断はこの後ミッドウエー海戦でも大きく明暗を分けることになりましたが、「勇猛ブル」の異名をとるハルゼーの決断は、予定を十時間早め全機発進でした。急遽白昼爆撃に切り替えた爆撃隊は午前七時二十一分、ドウリツトル中佐機を先頭に次々とホーネットを発艦していったのです。

日本の方は、まさか陸軍の爆撃機とは思ってもいません。海軍軍令部は、艦載機とすれば空母の位置から見て、「米軍機来襲は十九日早朝だろう」と判断していました。頼みの機動部隊はインド洋作戦を終え、台湾沖を通過して帰途についているところ。三千^{キロ}以上も離れていて、とても間に合いません。空母の接近を待つて、木更津海軍航空隊から一式陸上攻撃機三十機で攻撃することにしていたのです。本土防空は陸軍の担当でしたが、首都を守る戦闘機はわずかに四十四機。それもノモンハン事件で活躍した時から三年近くも経っていて、すでに旧式機になっていく九七式戦闘機です。東京上空の警戒に当たっているうちに燃料が足らなくなり、正午頃から柏や調布の基地に引き返し始めていました。その直後です。水戸付近の防空監視哨から「敵大型機一機発見」の緊急連絡が入ったのです。東部軍司令部も「敵機来襲は明朝」と思っていますから、味方機を間違えたのではないかと、空襲警報の発令をためらいました。第一弾の爆弾投下が午後零時十分、空襲警報発令はそれから十五分後と遅れてしまったのです。

日本の防空システムにレーダーがあり取り入れられるのは昭和十九年になってからですが、B25の方はレーダーがあると思っと思っていますから、海面すれすれ、超低空で侵入してきました。ご記憶の方も多いと思いますが、麗らかな快晴の土曜日、桜は満開でした。ラジオは正午のニュースの最中で、神宮球場では春の東京六大学野球リーグ戦が開幕され、入場行進を終えた選手たちが整列していました。空襲警報もなく、あちこちで日本の飛行機だと思っって手を振る光景が見られたそうです。燃料補給を終えた九七式戦闘機が慌てて迎撃に飛び上がりましたが、上昇を急いだため超低空のB25をなかなか発見出来ません。やっと捉えた時には最大

速力四百六十キロでは、二十キロも早いB25に簡単に振り切られてしまったのです。京浜地区には百十門の高射砲が配置されていましたが、各高射砲中隊からは次々と「一機撃墜」の威勢のいい報告が入ってきます。初めての対空射撃に興奮したのでしよう、派手に上がる弾幕を命中と間違えてしまったのです。東部軍司令部は撃墜報告が九機を数えたので、午後二時「敵は我が空地面航空部隊の反撃を受け、逐次退散中なり。現在までに判明せる敵機撃墜数は九機にして、我が方の損害軽微なる模様」。こう発表したのですが、その頃にはドウリットル爆撃隊は反撃らしい反撃も受けずに、全機中国大陸へ向かっていたわけです。

私も今度調べていて初めて知ったのですが、実は東条首相はこの日、輸送機で宇都宮から水戸視察に向かう途中、このB25とすれ違っているのです。それも操縦席がお互いののぞきこめるほどの至近距離で、東条は「あれはアメリカ機だぞ」と驚きの声をあげたと云います。夕方、陸軍省に戻った東条はすぐ被害状況と戦果を報告させたのですが、防空部隊の報告はあいまいでした。撃墜したはずの敵機の残骸が、地上のどこにも見つからないのです。東条はカンカンに怒って「すぐ東部軍の発表を取り消せ。こんなデタラメな報道をやったのでは、今後の戦果の発表に信を失う」。こう厳命しましたが、結局「九機撃墜」は取り消されませんでした。陸軍が「本土防空の空白」を国民に認めることになるからです。そしてこれが「撃墜の証拠」だと云わんばかりに、二十五日から始まった靖国神社の臨時大祭で、撃墜機の残骸を境内に展示したのですが、実際は中国の日本軍占領地区に不時着したB25を運んできたものでした。

一方ドウリットル爆撃隊の方は、白昼爆撃に変わったため中国大陸に着いた頃には夜になっていました。コースを見失って一機がウラジオストックへ、十三機が中国の飛行場に強行着陸や落下傘降下しましたが、水田や海岸に不時着した二機のうち二人が水死、八人が日本軍の捕虜になったのです。捕虜は空路東京に運ばれ東京憲兵隊の取り調べが始まりましたが、当時二十九歳のデシエーザー伍長が「恐怖の毎日だった」と云うほど苛酷なものでした。手錠をはめられ、足の爪先がやっと床につくくらいの姿勢で、壁の横木に八時間も吊るされました。板の上に乗せられ、鼻と口から水を注がれましたし、竹の棒や銃剣のサヤで無闇やたらと殴られたそうです。デシエーザーは戦後二十三年、日本人にキリスト教を布教するため宣教師となって再び来日しましたが、「自分を支えたのは宗教だった」。そう気付いたからだと話しています。

この空襲では、東京・新宿の国民学校で高等科一年、十四歳の少年が機銃掃射の犠牲になりました。新聞は「鬼畜の敵、校庭を掃射」と大見出しで報道しましたし、「日本を空襲した者は殺すぞ」と、見せしめに捕虜全員の死刑を主張したのが参謀総長の杉山元です。戦時捕虜の国際条約としては、明治三十二年のハーグ条約、昭和四年の捕虜の待遇に関するジュネーブ条約がありますが、日本はジュネ

―ブ条約の方は、軍部の反対があつて批准していませんでした。ただ東郷外相は開戦と共に「これを尊重する」と言明していましたし、昭和天皇も心配されていません。五月六日の機密戦争日誌には「捕虜取扱いに関する件、お上の耳に入り、鄭重な取扱いせよとのお言葉、侍従武官より次長宛伝達せらる」とあります。ところが二十一日の日誌に「要は断乎処分するに在るも、これが合法性をいかに取り扱うかにある。軍法会議に付する腹案なり」。こう書いているように、参謀本部は「非軍事目標に対する銃爆撃は、人道上許すべからざる行為」として、八人を捕虜としてではなく、戦時重犯罪容疑者として裁こうとしたのです。

しかし日本には、敵機搭乗員に対する処罰規定がありません。そこで、その法律を作ってしまったのです。七月二十八日付で出した「空襲軍律」と「同実施規定」がそうなのですが、無差別爆撃や国際法に違反した場合には「処罰は死とす。ただし情状により無期もしくは十年以上の監禁を以てこれに代えることが出来る」としています。しかも問題なのは、この軍律に遡る「遡及規定」を付け加えたことです。法律と云うものは制定された時から効力を発するものですが、「その効力は本軍律施行以前の行為にも適用する」と、米軍機の空襲にも遡って罰することが出来るようにしたのであります。捕虜を死刑にしたいと云う、乱暴な意図だけが露骨なものでした。

ここで東条の名誉のためにも云つておかなければならないのは、参謀本部の独走に強硬に反対したのが東条だったことです。東条は「八人は戦時捕虜として扱うべきだ。また彼らが捕虜になったのは上海の第十三軍指揮下なのだから、もし裁判をするなら十三軍法務部で行なうのが当然だ」と、参謀本部独自の裁判に反対のです。杉山は「空襲、防空は作戦事項であり、これは参謀本部の管轄だ」と主張しましたが、それでも相手は首相です。東条の意向を入れ、捕虜八人を上海に移して第十三軍の軍律会議にかけることになったのですが、その際参謀総長名で軍司令官に指令を出し、「検察官の求刑は死刑であること、審判で有罪であれば死刑の執行は八月中旬に実施すること」。これではまるで「結論は死刑だ」と云わんばかりの圧力です。八月二十八日の軍律会議はわずか四時間半の審理で八人全員に死刑を宣告しましたが、東条はこの判決にも異議を唱えました。「確かに米軍機は非軍事目標を攻撃し小学生を殺したが、この罪を搭乗員全員に及ぼすのは如何なものか。実行行為者とそうでない者との間には、量刑の差があつて当然だ」と云うのです。そして参内して、内大臣の木戸幸一に天皇への取り成しを頼みました。遅れて参内した杉山は、木戸から天皇の減刑の意志を知らされ、結局操縦士と射手の三人の死刑が確定し、五人は無期懲役に減刑されたのです。当時陸軍省兵務局長の田中隆吉少将は、東京裁判で「在米同胞がたくさん向こうに抑留されておるのに非常に悪影響を及ぼす」と、東条が反対したことを証言しています。東条には在米邦人への配慮と、報復が報復を呼ぶことへの憂慮もあったの

でしょう。

事実、十月十五日に三人の死刑が執行されると、「非道な国日本」とアメリカ国民の大きな憤激を買うことになったのです。実は第二十三日東丸が撃沈された四月十八日、やはりカツオ漁船の監視艇長渡丸の五人が捕虜になっていました。長渡丸はハルゼー機動部隊に接近、艦砲射撃と爆撃にたった一丁の機銃で応戦して沈められ、捕虜になった五人はルイジアナ州の収容所に送られました。ドウリツトル爆撃隊員処刑のニュースが伝わると、市民が「日本の捕虜をやつつける」と騒ぎ出したのです。しかし収容所長は、「絶対に市民に手を出させない」と云って、戦車や機銃をキャンプの外に配置し、日本人捕虜を守ってくれたそうです。

開戦直後のマレー沖海戦で、南遣艦隊司令長官の小沢治三郎中将はイギリス東洋艦隊の戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスの沈没を確認すると、攻撃機に「その翼を振って、イギリス海軍将兵の勇気を讃えよ」と命じています。十六年十二月十日のことですが、翌日には二機の飛行機が二隻の沈んだ海に花束を投げ入れ、祖国に殉じた英霊の冥福を祈りました。小沢は日本海軍最後の連合艦隊司令長官になった人ですが、たとえ国は異なっても海の勇士に「武士道精神」の発露を忘れなかつたのです。オーストラリア海軍も十七年五月三十一日の深夜、シドニー港に突入して戦死した特殊潜航艇三隻の乗組員六人に対して「勇敢な行為だ」として、海軍葬を行なつて敬意を払っています。ドウリツトル爆撃隊もまた「危険を顧みない勇氣ある行為」でしたが、日本は見せしめのため処刑と云う報復措置をとつてしまいました。これが戦後、さんざん非難された捕虜虐待の流れを作つたように思います。そしてこの「帝都空襲」のシヨックが、陸海軍の一部にあつた反対論を押し切つて、ミッドウエー作戦を実行させることになるのです。

× ×

アメリカ太平洋艦隊司令長官のニミッツは「ミッドウエーは情報の勝利であつた」と云っています。日本海軍の暗号が盗まれていたのです。マーシャル参謀総長も「奇襲を狙つた日本は、逆に奇襲されて敗退した。我々は限られた全兵力を敵の目標であるミッドウエーに集中して迎撃出来たが、さもなければ、アメリカはほぼ確実に三千マイルは後退せざるを得なかつただろう」。こう断言していますが、この奇襲と集中を可能にしたのが、まさに暗号の解読だったので。

十七年一月二十日、オーストラリア北方海域で機雷敷設中の伊号第百二十四潜水艦が爆雷攻撃を受けて沈没しました。連合軍はすぐさま潜水母艦を派遣して水深四十五メートルに沈んでいた潜水艦を引き揚げ、艦内から暗号書とその使用規定の回収に成功したのです。これが「宝の山」でした。日本海軍が「D暗号」と呼んで、作戦命令や艦隊通信など、重要電報のほとんどに使っているものだったので。収録語数四万五千語、それを五ケタの数字に換え、さらに五万個の乱数を加えると云つた二段階方式の高度な数字暗号で、「絶対に破られない」と日本海軍自慢のも

のでした。

ハワイの太平洋艦隊戦情情報班は、百二十人のスタッフを総動員して解読にかかったのですが、解読した言葉はIBMのカードにパンチされ、計算機に投入されていきました。新しい暗号が出てくると注意深く分類整理し、重複の手がかりを探して照合を繰り返しました。こうして四月中旬には、日本の次期作戦目標がニューギニア東南部のポートモレスビー攻略であること、作戦開始が五月三日、兵力は空母三隻であることまで突き止めたのです。ニミッツはこれを阻止するため直ちに空母二隻を派遣、五月七日の珊瑚海海戦となったのですが、それはミッドウェー海戦の前哨戦とも云うべき重要な意味を持っているものでした。

まず第一に、日米機動部隊が初めてぶつかった空母対空母の戦いだったことです。軍艦同士は最後までお互いの姿を見ることなく、互いに艦載機を繰り出しての航空戦でした。これからの海戦の姿を明示したもので、当然いかに敵を早く発見して先制攻撃をかけるか、索敵の重要性を指摘するものでしたが、ミッドウェーではこの貴重な教訓は生かされなかったのです。第二に、アメリカ側が大型空母レキシントン沈没、ヨークタウンが大破したのに対し、日本の損害は小型空母祥鳳沈没、大型空母翔鶴の中破でした。形の上では日本側の勝利でしたが、戦略的にはポートモレスビー攻略作戦が中止になり、アメリカとオーストラリアの連絡路を断とうとした米豪遮断作戦の挫折につながるものでした。しかも翔鶴は三か月の大修理が必要になり、瑞鶴も艦載機の損害が大きいため、この二隻の主力空母がミッドウェー作戦に参加出来なくなりました。

第三に、なぜアメリカの機動部隊が珊瑚海に来ていたのか、日本海軍は厳密に検討すべきでした。アメリカ海軍は少ない空母を有効に使うため、攻めてはさつと身を隠し、また思いがけない所に攻撃をかけるといった、ヒット・エンド・ラン作戦をとっていました。二月一日にマーシャル諸島、二十四日にウエーク島、三月四日には東京から千八百五十^キ離れた南鳥島を空襲したのです。これが連合艦隊司令長官の山本五十六に「日本空襲の前触れではないか」と、ミッドウェー作戦を決意させることにもなるのですが、問題は珊瑚海に来ていたのが偶然だったのか、どうかです。当然、暗号洩れ、作戦洩れを疑ってみるべきでした。

実は日本海軍も、D暗号を長期間使い続けていることに漠然とした不安は感じていたのです。そこで十七年四月一日から新しい乱数表に切り替えることにしたのですが、作戦に次ぐ作戦で作戦海域が多方面にわたり、艦船が方々に散らばっているため、暗号書を配る都合がきまません。五月一日に延期しましたが、今度はミッドウェー作戦に備えて各艦隊が集結し出している時期です。多くの指令、質問、回答が飛び交い、この通信量の激増が再延期を余儀なくさせました。結局機動部隊が出撃する五月二十七日の前日から、新しい乱数表に切り替えたのですが、アメリカ側はそれまでに必要な情報は十分過ぎるほどに入手しており、痛く

も痒くもなかつたのです。予定通り四月一日に改訂していたら珊瑚海海戦はなかつたでしょうし、それが五月一日だったとしても、アメリカの解読陣は新たな手がかりを求めて、少なくとも数週間は暗闇に逆戻りしていたでしょう。この暗号切り替えの遅れこそ、ミッドウエー海戦の運命を左右することになったのです。

ところでミッドウエー作戦は、最初からすんなり実施が決まっていたわけではありません。まず第二段作戦をどうするかで、陸海軍の間に対立がありました。陸軍は南方部隊の一部引き揚げまで考えていたくらいですから、南方資源地帯の守りを固め長期不敗態勢を築くべきだと云う主張です。海軍の方は、戦争の主導権を握り敵に反攻の機会を与えないためにも攻撃続行の主張でしたが、その海軍も軍令部と連合艦隊では意見が分かれていたのです。軍令部は、米軍が反攻してくるとすればオーストラリアを基地にするだろうから、フィジー、サモアを攻略して米豪の海上交通線遮断を急ぐべきとしました。これに対して連合艦隊はミッドウエー作戦でしたが、この発想には司令長官山本の意志が強く反映されていたようです。長年米国駐在武官をしてアメリカの力をよく知っている山本は、巨大な国力を持つアメリカを相手に長期不敗の態勢など、固められるものではない。短期戦で終わらせなければダメだし、ミッドウエーを攻撃すれば必ず機動部隊が出てくるだろう。それを叩けば、アメリカ機動部隊は少なくとも一年は動けなくなる。そこに、戦争を切り上げる機会が生まれると考えていたのです。

軍令部と連合艦隊司令部の間で激論になりましたが、真珠湾攻撃の成功は山本の発言力を圧倒的なものにしていました。最後は軍令部総長永野修身の裁断でミッドウエー作戦の承認となったのですが、四月十五日に軍令部で決定した第二段作戦計画は、妥協の結果として六月七日にミッドウエー攻略、七月中旬にフィジー・サモア攻略と、進撃方向が東と南に九十度も違う二つの作戦の併行実施となったのです。そしてフィジー・サモア作戦の前段作戦としてポートモレスビーを攻略しようとして、珊瑚海海戦となったわけです。

しかし、どうなのでしょう。ミッドウエーに果たしてそれほどの戦略的価値があったのか、また占領したとしても維持が可能だったかどうかです。ミッドウエーは名前が示す通り太平洋のほぼ真ん中であって、地図で見ると極めて重要なように見えますが、海軍の作戦基地としては数多くの制約を抱えています。二つの珊瑚礁から成る小島で、泊地が狭く港湾施設も貧弱ですから、とても大艦隊の基地にはなりません。飲料水をはじめ島で生産出来るものが何もなく、他からの補給に全面的に頼らなければならないのです。ところが一番近い日本の海軍基地トラック島からさえ、約三千七百キロも離れています。しかもミッドウエーに海軍航空兵力を前進させたとしても、ハワイまでは約千八百キロあって、当時最も航続距離の長い一式陸上攻撃機でもその作戦行動の圏外にありました。せいぜい潜水艦と大型飛行艇の基地として、使える程度のものだったでしょう。

軍令部が強硬に反対した理由もここにありましたが、そうした反対論を一挙に押し流したのが、四月十八日の本土空襲のシヨックだったのです。永野軍令部総長は「これではならぬ、これではならぬ」と独り言をいいながら、作戦室の大机の周りをグルグル回っていたと云います。軍令部も改めて太平洋の哨戒線を前進させることに積極的になり、アリューシャン攻略作戦の同時実施が付け加えられることになったのです。キスカ、アッツ島を占領して、ミッドウエーと共に哨戒基地にすれば、敵空母の本土接近を早期発見出来ると云う考えです。そして「ミッドウエーに兵力を出す余裕なんてない」と云っていた陸軍までが、翌日の十九日には陸軍兵力の派遣を海軍側に申し入れてきたのです。本土防空を担当する陸軍も、「帝都の空危うし」の現実を突き付けられ、シヨックだったのでしょうか。

しかしこの瞬間から、ミッドウエー作戦はその目的も意識も、微妙にずれていくこととなります。山本の狙いは、あくまでも「敵空母を誘い出し、その撃滅」にあったのに、軍令部や陸軍にとつては「ミッドウエーとアリューシャンを結ぶ東方哨戒線の前進であり、そのためのミッドウエー占領」となったのです。軍事作戦では、作戦目的の単純化と作戦努力の集中が大切だと云われますが、それが空母撃滅と占領と云う二つの異なった目的を持つことになりました。これがやがて機動部隊指揮官である南雲忠一中将の決断に、大きな影響を与えたように思います。陸軍部隊を伴っている以上、南雲にとつては、それを無事に上陸させ、いかにミッドウエー確保するかが、頭から離れなかつたのではないのでしょうか。

大本営は五月五日、大海令第十八号によつて、これは大本営海軍部命令のことですが、山本に「連合艦隊司令長官八陸軍ト協力シ、ミッドウエー、アリューシャン西部要地ヲ攻略スベシ」と命令しました。しかしたちまち、ハワイの戦闘情報班にキャッチされたのです。ただ暗号ではミッドウエーにAF、アリューシャンにAOの地名略語を使っていましたから、アメリカ側にとつてはそれがどこなのか、日本の機動部隊がどこへ出てくるのが問題となってきました。戦闘情報班の責任者ロシユフォート中佐は「暗号解読の虫みたいな男だったようですが、傍受する電報にAFが頻繁に現われることに気付いていました。三月に日本の飛行艇二機がハワイを空襲した時にも、途中で「ワレAFノ付近ヲ通過セリ」と打電しています。AFとはミッドウエーのことではないか、そう思ったロシユフォートは五月十一日だったと云いますが、決定的な証拠を掴むため日本をワナにかけようと思いついたのです。「ミッドウエーの蒸留装置が故障して飲料水が不足している」。こんなニセ情報をミッドウエーの指揮官に平文で打電させるよう、ニミッツに要請したのです。二日後、ロシユフォートは躍り上がりました。「AFは飲料水に欠乏している模様」との、日本海軍の無電を傍受したのです。

ニミッツの行動は迅速でした。珊瑚海海戦に参加していたフレッチャー少将の第十七機動部隊、東京空襲からの帰途についていたハルゼー中将の第十六機動部

隊に、「直ちに帰投せよ」と命令したのです。空母ヨークタウンから「飛行甲板が爆破され修理に三か月必要」との報告が入ってくると、海軍工廠に予め部品を用意させ、わずか三日間でとにかく飛行機を発艦できるように応急修理させました。ニミッツには、ヨークタウンを含めて三隻しか手持ちの空母がなかったのです。残る問題は日本の攻撃時期でしたが、これも日時暗号が片仮名四十七文字の組合せであることを突き止め、ミッドウエー攻撃は六月三日から五日の間と割り出しました。こうして日本が暗号の乱数表を切り替えた時には、日本の艦隊編成から空母翔鶴、瑞鶴の不参加、指揮官の名前や航路まで掴んでいたそうです。それでもワシントンや陸軍は、日本の攻撃目標はハワイではないかと疑っていましたが、ニミッツは動かされませんでした。ロシユフォートを信頼し、その解説情報に全てを賭けたのです。

五月二十八日、まずエンタープライズとホーネットが真珠湾を出港しましたが、第十六機動部隊指揮官はハルゼーが皮膚病で入院したため、スプルーアンス少将に代わっていました。ハルゼーはいるだけで部下が頼もしく思ったと云うほど、勇猛果敢な指揮官でしたが、初めて機動部隊の指揮をとることになったスプルーアンスには、それに劣らない冷静、緻密さがありました。ニミッツから命令を受けると、「日本の機動部隊にこちらから突っ掛かっていくのではなく、敵に感付かれることなく、ミッドウエー北東海面で待ち伏せしたい」。こう申し出て許可を得ていたのです。大破されたヨークタウンがよろめくように帰ってきたのが二十七日午後、それが三十日夜には応急修理を終えて出ていきました。三隻の空母は六月三日、「ポイント・ラック」、「幸運な地点」と名付けたミッドウエー北東六百五十^キの海域で合流し、待ち伏せ態勢に入ったのです。この位置は進攻してくる日本艦隊の脇腹に当たり、しかも日本側の偵察が最も届きにくい場所でした。

そして、このアメリカ機動部隊の素早い出撃が、極めて重要な意味を持つてくることとなります。日本海軍は敵空母発見のため、ハワイからミッドウエーにかけて十一隻の潜水艦を二列の散開線に配置したのですが、一番早く到着した潜水艦でも六月二日でした。その時はすでに、アメリカ空母は三隻とも通過した後だったのです。「空母が出てくるのは、こちらがミッドウエーを空襲してから」と思い込んでいたせいですが、せめて三日早く配置していたら間違いなくヨークタウンを捉えていたでしょう。しかも五月三十日に予定していたハワイの敵情偵察も中止になっていました。二式飛行大艇がマーシャル諸島を飛び立ち、途中フレッチ・フリゲート環礁で待機している潜水艦から燃料補給を受け、真珠湾の空母の動静を探ってくる予定だったのです。ところが二十九日に潜水艦が着いて見ると環礁にはアメリカの軍艦がいて、周辺の航空警戒も行なっています。三十一日になっても動かないため偵察作戦は中止になったのですが、アメリカは三月に日本の飛行艇がハワイを空襲した時、ここで燃料補給したことを掴んでいました。日

本に利用されないように、先手を打っていたのです。

こうして暗号解読に加えて、敵情不明のままミッドウエー海戦を迎えることになるのですが、それでも万全の準備を整え、細心慎重に作戦を進めていたら、敗れることはなかったでしょう。南雲機動部隊はインド洋作戦から帰ってたばかりで、開戦以来その航程は九万二千^キを突破し、人も軍艦も疲労困憊に達していました。しかし挙げたは戦果は大きかったし、みんなこの戦果に酔い、アメリカを甘く見るようになっていました。作戦計画もその実施も、周密緊張を欠くことになつたのです。新鋭空母翔鶴、瑞鶴とその艦載機百五十機の不参加は、航空兵力の三分の一減ですから、当然作戦計画の修正を要する場合でした。また三月まで無人のフレンチ・フリゲート環礁に米軍が進出してきたことも、作戦が洩れているのではないか、疑つて見るべきでした。ところが連合艦隊首席参謀の黒島亀人大佐は、「味方機動部隊の力を信じていたので、作戦の変更や特別の処置は考えなかつた」と云っています。

機密は街中にさえ洩れていました。呉の理髪店で、ある士官がその主人から「今度はいよいよミッドウエーらしいですな」と耳打ちされ、飛び上がったと云う話があります。大阪警備局の戦時日誌にも「内地郵便物を検閲したところ、今次作戦を推知せしむるもの多数を発見す」とか、「上陸員が不用意に今次作戦に関する事項、口外せる者多し」といった報告が記録されています。ひどい話は、ミッドウエー攻略に当たる陸戦隊の副官が横須賀郵便局宛てに「六月中旬以降、当隊宛ての郵便物はミッドウエーに転送されたし」と電報を打つたと云うのです。傍受したアメリカ側も、攪乱の謀略電報ではないかと頭を抱えたそうです。

五月二十五日、連合艦隊旗艦の大和で南雲機動部隊との最終的な打ち合せが行なわれましたが、連合艦隊参謀長の宇垣纏が南雲に尋ねました。「ミッドウエーを空襲している時、敵の基地空軍が襲ってきたらその時の対策は？」。南雲と云う人は、何でも航空参謀の源田実中佐任せだったようです。それだけ「海軍航空のエース」と云われた源田の実力が抜きんでていたのでしょうか、黙つて源田の顔を見ると、源田は「わが戦闘機を以てすれば鎧袖一触である」。すると山本はキツとなつて、「鎧袖一触なんて言葉は不用心極まる。実際に不意に横槍を突つ込まれた場合には、どうするか、十分に研究しておかねばならぬ」。そして「この作戦はミッドウエーを叩くのが主目的ではなく、そこを衝かれて顔を出した敵空母を潰すのが目的なのだ。いいか、決して本末を誤らぬように。だから攻撃機の半分に魚雷をつけて待機させるように」。こう厳しく注意した山本でしたが、この山本の真意がどこまで南雲司令部に徹底していたのか。大海令が「ミッドウエー攻略」を作戦目的の第一義に挙げている以上、いくら連合艦隊側が「空母撃滅」が本当の狙いだと作戦指導したとしても、この作戦目的の二面性に大きな問題があったように思います。

艦隊編成にも問題がありました。一番中心になる南雲機動部隊は、空母四隻、飛行機二百六十三機。これに支援隊、警戒隊として戦艦霧島、榛名など総勢二十一隻です。攻略部隊は戦艦二隻に守られ、陸戦隊と陸軍部隊の五千八百名でしたが、この他に「主力部隊」と云うのがあるのです。大和以下戦艦七隻、三十隻以上の大部隊で、全般作戦を支援すると云うのですが、高速空母部隊が雌雄を決する近代海戦に、速力二十ノットの低速戦艦部隊が、それも五百五十ノットも後方をのこのこついていて、一体何が出来るのでしょうか。大和の誇る四十六センチ主砲にしても、その最大射程は七十四センチに過ぎません。空母部隊が襲われても、全く役に立たないのです。機動部隊のパイロットたちは、「柱島艦隊が、これは広島湾の柱島泊地にいた戦艦部隊のことですが、太平洋で観艦式でもやるつもりなんだろう」と皮肉ったそうです。

まさに、顔見せ大興行と云われても仕方のないものでした。連合艦隊内部でも異論が出た時、山本は云ったそうです。「情だよ。国民は長官がいつも先頭に立っていると思っている。柱島などに、どうしておられるか」。「指揮官先頭」は日本海海戦以来の海軍の伝統でしたが、私はそれ以上に、開戦以来活躍しているのは機動部隊だけ。柱島に座ったままの戦艦部隊にも、勝利に参加の喜びを与えてやりたい、勲章のチャンスをやって士気を鼓舞したい。この思いが強かったのだと思います。山本はこの三月、支那事変の論功行賞で勲一等旭日大綬章と功二級金鵄勲章を受けていました。支那事変の功績と云っても、海軍次官時代にアメリカの砲艦パネー号の誤爆事件を解決したくらいのものでしたから、山本も「こんなもの貰っていいのかね」と、てれたように苦笑いしたそうです。まあ連合艦隊司令長官の肩書きで貰ったようなものでしたが、金鵄勲章には功一級で千五百円、二級で千円と終身年金がつきます。ミッドウエーで勝利すれば、形だけ参加しただけでも勲章が確実になるのですから、これが人一倍情の濃い山本の気持ちだったのではないのでしょうか。ところが、この山本の「温情」が重大な作戦ミスを招くことになるのです。

海軍記念日の五月二十七日、まず南雲機動部隊が旗艦赤城を先頭に柱島を出ました。続いて二十九日には、山本の乗る大和以下の主力部隊と攻略部隊が出撃したのですが、各艦隊は所在をくまらずため無線封止を行なっています。作戦の総指揮をとらなければならぬ連合艦隊司令部そのものが、洋上に出してしまったため自ら口を封じることになったのです。指揮をとろうにも、適切な指揮がとれなくなっていました。

実は六月二日の夜、マーシャル諸島のクエゼリン環礁にある第六艦隊司令部、これは潜水艦艦隊の司令部ですが、重要な通信をキャッチしていました。それはアメリカの空母が哨戒機と交信していると思われるもので、翌日には電波の方位測定にも成功しましたが、その位置はミッドウエーの北北東三百十キロ付近。まさ

にアメリカ機動部隊が、ミッドウエーの傍で行動していることを示す警報だったので。第六艦隊司令部は直ちに作戦特別電報で大本営に報告すると共に、ミッドウエー作戦の全部隊にも打電しました。山本はすぐ「赤城にも念のため知らせてはどうか」と注意したのですが、参謀たちは「赤城も当然傍受しているだろうし、無線封止を破つてまで知らせる必要はない」と反対です。ところが大和に比べてマストの低い赤城は、この緊急電を聞き逃していたのです。もし大和が柱島にいたら、ためらわずに打電したでしょうし、南雲もこの情報を知っていたら、その後の対応が決定的に違っていたでしょう。南雲部隊は結局「米空母が出てくるのはミッドウエーを空襲してから」と思い込んだまま、ミッドウエーに向かうのです。しかも赤城は、絶対に出してはいけない電波を出してしまいました。三日、ミッドウエー北方地点で進路を変え、ミッドウエーに向けて南下することになったのですが、物凄い濃霧です。後続の艦に知らせようにも、手旗信号も探照灯の信号もききません。南雲は「微力電波で変針の電信を打て」と命じたと言っています。いくら微かな電波でも、はるか後方の大和でもキャッチ出来たくらいですから、もっと間近にいるアメリカ機動部隊には、赤城の位置から速力まで教える結果になってしまいました。

ミッドウエー海戦は日本時間では六月五日ですが、ここからはミッドウエー時間の四日でお話します。ミッドウエー空襲の第一次攻撃隊百八機が四隻の空母から発艦したのが四日午前四時半、日の出二十分前でした。南雲はそれに先立って連合艦隊司令部に、「指揮官の状況判断」を打電していますが、これほど誤った敵情判断もそうはないでしょう。「敵は戦意に乏しい」とか、「敵の索敵は北西、北方には嚴重でないので、わが企図を察知していない」とか。さらには「敵空母が付近海面に行動中とは推定していない」と云うのですが、全ては自己過信と希望的観測に基づくものでした。

しかも、一番肝心な索敵にも失敗してしまったのです。普通なら敵の早期発見のため「二段索敵」と云って、夜明け前に一段目の索敵機を出します。一時間後に二段目の索敵機が、同じ海面を見落としがたいよう飛ぶのですが、「一段索敵」しかやらなかったのです。敵空母はいないだろうと云う油断もありましたし、偵察より攻撃重視。攻撃隊の飛行機を少しでも多くしたいと、索敵機の数を惜しんだ結果でした。さらに索敵機の発進が攻撃隊とほとんど同時になったうえ、七つの方向に分かれて飛んだ索敵機七機のうち、巡洋艦利根の偵察機がカタパルトの故障から五時十分発進と、三十五分も遅れてしまったのです。結果的にはこの利根機が敵空母を発見することになるので、この遅れは致命的でした。

攻撃隊長は真珠湾攻撃の総隊長・淵田美津雄中佐の予定でしたが、急性盲腸炎で手術したため、急遽飛龍飛行隊長の友永丈市大尉に代わっていました。淵田は利根機の遅れを見て「病み上がりのせいかな、弱点ばかりが目につき、考えが悲観

的に傾いて仕方なかった」と云っています。源田中佐も風邪気味だったと云いますが、「つい偵察機さえ出しておけば、敵は見つかるといふ気になってしまった。自分の作戦の成功続きに私なんかも凶に乗っていた」とは戦後の敗戦の弁です。

索敵機を出した時間は日米ほとんど同時でしたが、二十数機と日本の三倍以上も出したアメリカ側が午前五時三十二分、先に日本艦隊を発見したのです。ミッドウエーの米軍基地では二十六機の戦闘機に続いて、百機近い爆撃機、雷撃機が全機発進、日本艦隊攻撃に向かいました。入れ違いに日本攻撃隊のミッドウエー空襲が始まったのが六時半。空中戦は一方的で、瞬く間にアメリカ戦闘機隊を壊滅させましたが、対空砲火は激しく狙いも正確でした。八機が撃墜され、母艦に辿り着いても使用不能となったのが二十六機。隊長の友永機も左翼燃料タンクを撃ち抜かれました。友永は、味方上陸部隊の援護攻撃としては不十分だ。まだ防御陣地が数多く残っており、滑走路の破壊も十分でない。午前七時、「第二次攻撃の要あり」と打電したのです。

ミッドウエーを飛び立った米軍機の日本空母攻撃が始まったのがその直後、七時七分でした。ただ実戦経験がなく、飛行時間も三、四時間の者がほとんどでしたから、驚くほど下手だったと云います。一発の命中弾もないうちに、片っ端から撃ち落とされていきました。ここに心の隙間が出来たのです。敵機はみなミッドウエーから来たものであり、七機の索敵機からは何の報告もありません。「敵空母はいないだろう」と云う先入観が、「近くに敵空母はいない」との判断に変わってしまいました。南雲は七時十五分、ミッドウエー再攻撃の決意を固め、「兵装転換」と云って攻撃装備の変更を命じたのです。四隻の空母の甲板には日本の強い指示もあり、敵空母に備えて百八機が待機していましたが、魚雷で陸上基地を攻撃しても何にもなりません。魚雷をおろして陸用爆弾に換えているところへ七時二十八分、利根機から思いもかけない電報が入ってきたのです。「敵ラシキモノ十隻見ユ」。ミッドウエー北東二百四十マイル、三百八十^キ地点でしたが、司令部は愕然となりました。

指揮官に大切なのは、不測の事態が発生した時、いかに瞬時に有効かつ適切に反応するかでしたが、南雲は決断に迷いました。そんな所に味方がいるはずがないのですから、即座に敵、それも空母と見て攻撃を決意しなければいけなかったのです。「艦種を知らせろ」と命じているうちに、貴重な時間が失われていきました。七時四十五分になってやっとアメリカ艦隊攻撃を決意し、攻撃隊にもう一度魚雷と艦船用爆弾に付け替えるよう命じたのです。整備員が外したり、つけたり大騒ぎしているところへ第一次攻撃隊が帰ってきて、上空を旋回しながら収容を待っています。しかも八時二十分、利根機は「敵空母ラシキモノ一隻ヲ伴ウ」と報告してきたのです。司令部はジレンマに襲われました。敵空母攻撃を急ぐためその飛行機を甲板に並べれば、一次攻撃隊は着艦出来ず燃料切れで不時着水するも

のも出てきます。そうかと云つて、攻撃隊を收容してからは敵空母攻撃隊の発進が遅れてしまいます。飛龍の第二航空戦隊司令官山口多聞少将は、「現装備ノママ攻撃隊直チニ発進セシムルヲ至当ト認ム」と意見具申してきました。しかし源田中佐は云つています。「長い間苦楽を共にしてきた戦友たちに『燃料がなくなつたら不時着水して駆逐艦にでも助けてもらえ』という気持ちには、どうしてもなれなかつた」。それに戦闘機は全部防空戦闘に飛び上がっていて、それを攻撃隊につけてやるには一度着艦させて、燃料補給をする必要があります。戦闘機に守られない攻撃機がいかにか脆いかは、いま目の前で米軍機を叩き落として見たばかりです。南雲は結局、源田中佐の進言を容れ、ミッドウエー攻撃隊をまず收容して兵力を整え、十分な戦闘機をつけた上で、一挙に敵空母を撃滅する方針をとつたのです。

四隻の空母は混乱を極めました。降りてくる飛行機を迎え入れるため、すでに甲板に出していた攻撃機をエレベーターに乗せて、ひとまず甲板下の格納庫に收容しなければなりません。甲板にも格納庫にも至る所に魚雷、爆弾がゴロゴロ転がっています。「兵は拙速を貴ぶ」と云います。航空決戦では、とにかく先制攻撃が鉄則でした。参謀長の草鹿龍之介少将も戦後になつて反省していますが、たえ不完全な攻撃隊であつても、八百キの陸用爆弾なら空母の甲板に穴くらいは開けられるのです。第一、敵艦載機の攻撃を考えれば、防空戦闘には不要の攻撃機をまず出して、空母を身軽にしておくべきでした。山口は海軍部内の誰もが「一度は艦隊の長官をさせてみたかつた」と云うほど有能な実戦型指揮官でしたが、南雲の方は少々遅れても完璧を期す方を選んでしまいました。最終的には、指揮官のこの判断の違いがミッドウエー海戦の運命を決めたように思います。第一次攻撃隊の收容は午前九時過ぎにやつと終わりましたが、九時十八分、水平線からアメリカ雷撃機十八機の編隊が姿を現わしたのです。

第十六機動部隊指揮官スプルーアンス少将の決断は際立っていました。空母の全機発艦には一時間近くかかるため、最初は航続力のある飛行機から発艦させて上空で待機させ、後続機と合流してから「全兵力一体の攻撃」を考えていたので、ところがエンタープライズが利根偵察機に発見されてしまいました。スプルーアンスは直ちに攻撃隊発進を決意し、午前七時半、すでに上空にある飛行機から「逐次進撃せよ」と命じたのです。これが凶らずも、切れ目のない波状攻撃を生むことになりました。それでも日本の戦闘機隊は優秀でした。たちまち第一波のうち十七機を撃墜し、空母も巧みな操艦で掠り傷一つ負っていません。各母艦からは「攻撃隊発艦準備急げ」の督促命令が出され、第二波、第三波の雷撃機も撃退して、日本艦隊からは歓呼の声が挙がりました。ただ低空で襲ってくる雷撃機を追い回しているうちに、上空警戒機がみんな低空に集まってしまったのです。見張り員の注意も低空ばかりに向けられます。午前十時二十四分、「発艦始め」の合

図で赤城から先頭のゼロ戦がふわりと空中に浮かんだ瞬間です。「敵急降下」の見張り員の甲高い叫び声があがったと思うと、頭上から二十四機の急降下爆撃機がそれこそ降るように落下して来たのです。一発目の爆弾は辛くもかわすことが出来ましたが、二発目は赤城の甲板を貫き格納庫で爆発しました。あと五分あれば全機発進出来た、まさにわずか五分間の出来事だったのです。

赤城に三発、加賀と蒼龍に四発命中しましたが、甲板には魚雷や爆弾を抱えた飛行機が、それも燃料を満載して並んでいます。次々と誘爆して、一発が何百発もの爆弾を食らったのと同じ結果になったのです。どの空母も被爆した瞬間、動力を失ってしまったって消火ポンプが動かず、たちまち紅蓮の炎に包まれていきました。赤城に乗っていた後藤仁一大尉は、一瞬「あり得ないことが起こった」と思ったそうです。「周囲にいた先輩の方を見ると、どの顔も一種異様な笑いを浮かべていました。ヘラヘラ苦笑しているのです。人間が真に虚脱状態に陥った際に起こす生理的な反応でしょうか、白昼夢を見ているようでした」と云っています。

こうして見ると、ミッドウェー海戦はまさに錯誤、錯誤の連続でしたが、幸運は最後までアメリカ側について回ったようです。この急降下爆撃隊にしても、エントープライズと一緒に飛び立った雷撃隊とはぐれてしまい、三時間近く飛んいても日本艦隊を発見出来ません。燃料も尽きかけ、指揮官のマックラスキー少佐があと五分飛んで発見出来なければ引き返そうと思っている時、一隻の駆逐艦の白い航跡を見付けたのです。この先に日本空母がいるかも知れない、そう思っ

て航跡を追っているうちに、双眼鏡が空母赤城の姿を捉えたと云うのです。

加賀、蒼龍は火薬庫に火が入って大爆発を起こし沈没、赤城も炎上しながらただ浮かんでいるだけの存在になりました。南雲は旗艦を巡洋艦長良に移しましたが、ただ一隻無傷で残った飛龍は、司令官山口の闘志そのままに猛反撃に移ったのです。午前十一時五十八分、艦上爆撃機十八機、戦闘機六機が攻撃に向かい、ヨークタウンに三発命中させて大火災を起こさせました。偵察機から「敵空母一隻発見」の報告が入ってくると、山口は手持ちの全機、と云っても雷撃機十機、戦闘機六機でしたが、これを投入しました。隊長の友永機は左翼燃料タンクをやられていましたが、修理の暇がありません。友永は整備員に「敵は近いからそのままでもいいよ。右のタンクを一杯にしておいてくれ」と云って出て行きました。自分が行かなければ一機減ってしまう。片道覚悟で出撃したのですが、目撃者の話だと、友永機は半分火に包まれながら、空母の艦橋付近に突っ込んで行ったそうです。魚雷を二本を命中させ、日本側はこれで「二隻やっつけた」と思っていました。実はこれも同じヨークタウンだったのです。二時間足らずの間に消火に成功し、炎が上がっていないものですから、別の空母だと思ったのです。たちまち火が回って、消火ポンプも動かなかった日本の空母とは大違いでした。攻撃ばかり重視して、防御とか偵察には力を入れなかった日本海軍の用兵思想のミスで

しよう。ヨークタウンは珊瑚海海戦以来、これで三回目の被害です。水兵たちは「ジャップの野郎、何でヨークタウンばかり狙うんだ」と呪ったと云いますが、最後は日本潜水艦の魚雷攻撃で止めを刺されました。

飛龍は午後五時十二分、山口がわずかに残った六機で薄暮攻撃をかけようとしている時、四発の命中弾を受けて炎上しました。深夜になって艦が三十度くらいに傾くと、艦長の加来止男大佐は八百人近い生存者を飛行甲板に集め「総員退艦」を命じたのです。山口にも退艦を勧めましたが、山口はにっこり頷くだけだったと云います。幕僚や幹部が「自分たちも」と残留を申し出ると、山口は「その気持ちは嬉しいが、戦いはまさにこれからだ。君らは生き残って強い海軍を作ってくれ。退艦を命ずる」と厳命し、「これでも家族に届けてもらおうか」と云って、黒の戦闘帽を脱いで参謀に渡したそうです。飛龍も赤城も、味方駆逐艦の魚雷で沈められました。

連合艦隊司令部がミッドウェー作戦の中止を全軍に打電したのは、五日午前二時五十五分でした。日本の損害は空母四隻と巡洋艦三隈沈没、戦死者三千五十七名、飛行機喪失二百八十七機。この主力空母激滅と歴戦の熟練パイロットを百二十一名も失ったことは、制空権、制海権の維持を難しくさせ、開戦以来日本海軍が握っていた作戦の主導権をアメリカ側に譲り渡すことになったのです。大本営は十日、ミッドウェー作戦の戦果を「米空母二隻撃沈、航空機百二十機撃墜、我方の損害航空母艦一隻喪失、一隻大破、未帰還機三十五機」と鳴り物入りで発表しましたが、これが「ウソの大本営発表」の始まりでした。

そして海軍は、この敗北を徹底して隠そうとしたのです。作戦に参加した者全員が一種の「軟禁」扱いを受けました。沈んだ艦の乗組員は海兵団ごとに集めて外地に運ばれましたし、パイロットは一纏めにして鹿児島鹿屋基地に移されました。呉、佐世保、横須賀の海軍病院に分散収容された約六百名の負傷者も病室は完全に外部との連絡が遮断され、家族に出す手紙も封書は禁じられたそうです。真珠湾の立役者淵田中佐でさえ例外ではなく、「時として俘虜収容所ではないかと云う錯覚に陥るほど、治療に名を借りた軟禁であった」と云っています。

首相の東条も最初は大本営発表程度のことしか知らされず、天皇から真相を聞かされ愕然としたと云う話があります。戦争中の最高指導者が、味方の敗戦の規模、実態を知らないと云うのでは、効果的な戦争指導など、とても無理な話でした。南雲機動部隊の参謀長草鹿龍之介少将は戦後「今から考えると、ミッドウェー作戦には無理があつた。人も艦も疲れておつた。自分の心にも奢りがあつた。そして大体、戦争全体に無理があつた」と云っています。私もその通りだと思います。敵を知らず、己れを知らず、戦争全体に最初から無理があつたのです。そして米軍の本格的な反攻は、日本に立ち直る暇も与えずに、十七年八月七日のガダルカナル上陸となって現われるのですが、この話は二月にお話します。